以上の用例から、道真は「風情」を、「胸中の思い」や「優雅な味わい」という意味の詩語として使用していると思われる。

参考

波戸岡旭氏は、『宮廷詩人菅原道真　「菅家文草」「菅家後集」の世界』のなかで、つぎのように述べる。

（第101句以降）まず、「斉物論」・「寓言」と、『荘子』の二篇の名を掲げ、道真自身、荘子の思想の奥義に触れ得て心癒えたことを述べる。だが、生来詩人である道真は、思想界に悟入できないのであって、すぐに眼前の景に引き戻されてしまう。「還致」すなわち山水の風情は、胡蝶の夢の示す世界よりも、なお奥深い味わいがあり、その風雅なる情趣に惹かれる己が風流癖は、消えることがないというのである。逆境にあっても詩的環境はいよいよつのり、おのずと詩は生まれ出るのである。このように、道真は老荘思想に分け入って一旦は救われるかに見えるのだが、しかし、結局は現実の感覚の世界に激しく反応し、悲哀を詠じてやまない詩人である己自身に気づくのである。

（須藤　修一）

484　紋意一百韻（14）　～105句から112句～

本文　平仄

105　文華何處落　○○○●●